の中には硬目に焼きあげたものもあるが、多くは赤褐色の素焼である。凸帯は低くて広いもの（第8図写真1）、低くて広く且つ断面台形で頂きの両縁が僅かに盛りあがり、刷毛目で仕上げたもの（同上2）、断面台形の高目のもの（同上3）等がある。又凸帯の上下に沿って平行線の刷毛目をほどこしたもの（同上1・2）と、凸帯間を縦の刷毛目で整えたうえに、更に凸帯の上下に沿って刷毛目で仕上げたもの（同上4）が見られる。その他土師高坏の小片一個（同上5）がある。

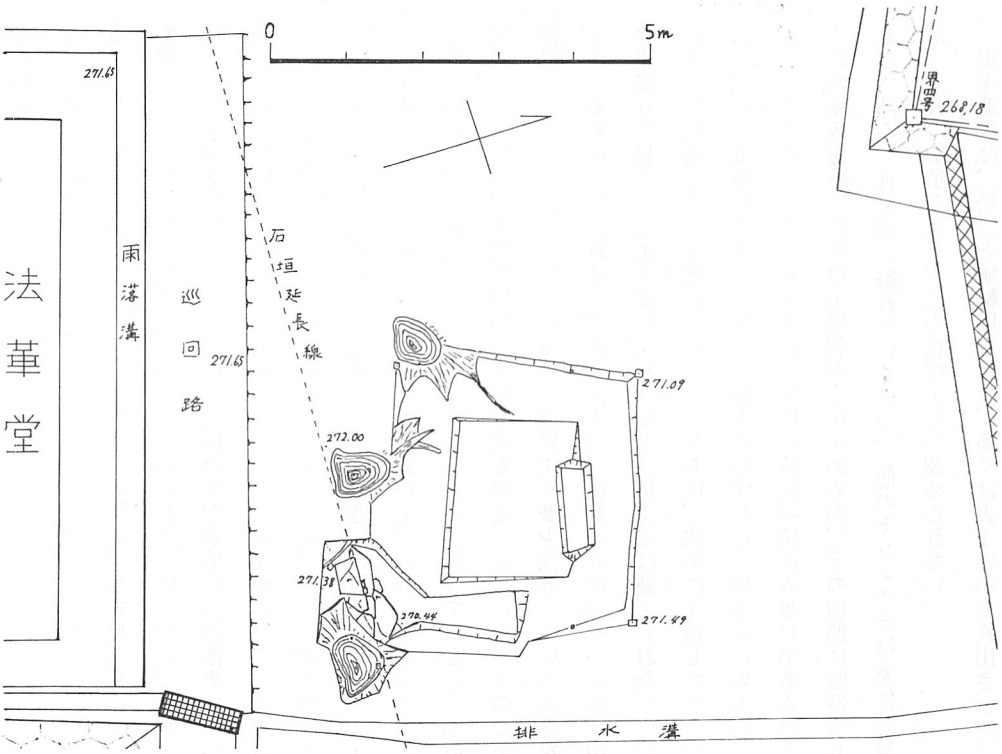
なお、第三トレンチから墳丘くびれ部方向に堀を横断して外堤と墳丘間の堀底の状況をしらべたところ、堀底は砂礫層とみられる極めて固い層で、その中央部の約四〇メートルはほぼ水平に走っていることが知られた。現在この上に約六〇センチのヘドロが堆積している。先にのべた外堤浸蝕面に河床礫層が露出していることから考え合わせて、当陵の堀は概して河床堆積礫層を掘り込んで形成されているものと考えられる。

以上のように施工上問題となることがなかったので、現在の外堤法面の直下に基礎を置いた空石積の護岸擁壁を設置した。

（戸原純一）

三　大原陵倉庫建設敷地の調査

大原陵域内の法華堂の傍に倉庫を建設するに当り、試掘調査を実施した処、地下八五センチから九〇センチ（標高二七一・三八メートル）で、



第2図　大原陵倉庫敷地調査位置図（縮尺100分の1）

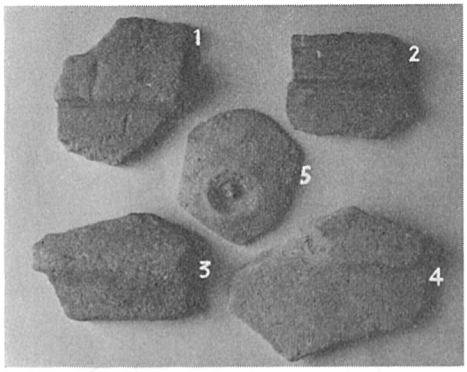
五〇センチ角程の石が露出したので、昭和四八年八月七・八・九の三日間、建設予定地の発掘調査を実施した。調査箇所は、法華堂の北側の勝林院境内との間にある傾斜地の上部で、法華堂北側雨落から二・五メートルをへだてた処にあたる。（第2図）発掘は、試掘で露出した石を中心に行い、石の東方に近接して、最大径九〇センチ、樹齢二百年余と推定される檜の古い切株を検出、その下方に、この切株にくわえ込まれた状態で東西に走る石垣を検出した。この石垣は、試掘で出土した石の下に連続し、北側を正面として、水平面と約七五度の勾配で立上っている。露出範囲は東西約一・五メートル上下約七五センチ（下部標高二七〇・四四メートル）であるが、ボーリングの所見では、左右と下方に延びていることが察せられる。用石は、見付幅七五～三〇センチ、高さ六五～二〇センチの自然石で、積方は勝林院参道沿いの三千院の石垣と同巧の乱積である（第9図写真）。石垣天端の標高は二七一・三八メートルで法華堂基壇面より二七センチ低い。この石積の状態から見て単なる土留めとは思われない。建造物の基壇の石積と速断は出来ないが、石積西側の延長線は法華堂雨落ちの北西隅近くを通ることになる。

石垣の上部及び側面を覆う土は灰褐色の砂質土で、拳大の角礫を交え、その上部は黒褐色砂礫土で表面は黒色腐植土である。灰褐色の砂質土の中部、石垣際の部分から陶磁器片（第10図写真）、下部石垣際の切株の下から土器片多数が出土した。陶磁器片は林屋氏の御教示によれば、第10図1～3・5宋青磁、同8舶載青磁、同10伊万里亀屋谷窯（十七世紀）、同4美濃焼天目釉（室町時代）など。土器片は所謂かわらけで、白土器、赤土器である。完形近く接合出来たものを第18図に示した。

（石田茂輔）

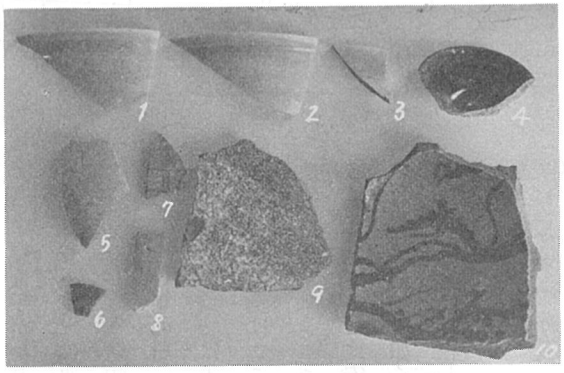
四　近衛天皇陵内貯水槽設置予定地の調査

近衛・鳥羽両天皇陵の防災工事施工に当り昭和四八年一〇月二五日から一三日間、近衛天皇陵内の貯水槽設置予定地の発掘調査を行った。当所は、同陵多宝塔の北西約一三メートルの処に位置する同陵樹林地で、東西約五・七メートル、南北一一・七メートルの長方形の地区である。発掘は、第3図のようにこの地区の四辺に沿って約二メートル幅で発掘区を設定、南辺沿をC、北辺をD、CDの中間部東辺をB、西辺をA、の四区に分け、C・B・D・Aの順に発掘した。CB両区では、昭和九年の多宝塔改体修理により生じた旧塔の不燃廃材を埋納した土壙につき当った。この土壙は、東西の幅約三・五メートル。ほぼ多宝塔と平行で南北に走り、C区を斜めに横断し、C区の両端を除いた大部分を占める。土壙の北端はB区南部に露出する。地下約七〇センチ（標高一五・三五メートル附近）を上面とする灰色砂質粘性土層を掘込んで、古瓦・石材・鉄釘・鉄管・銅板などの廃材を納め、一部は盛上がり、その上部は二～三層の盛土になっている。この埋納壙部分の掘下げは中止し、貯水槽の設置位置を、ABの北半部及びDとその東側部分に変更し、Dの東側

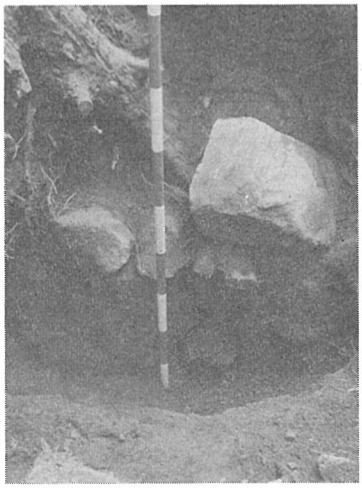


第８図　白鳥陵外堤出土品

第７図　仲哀天皇陵参道埴輪出土状況

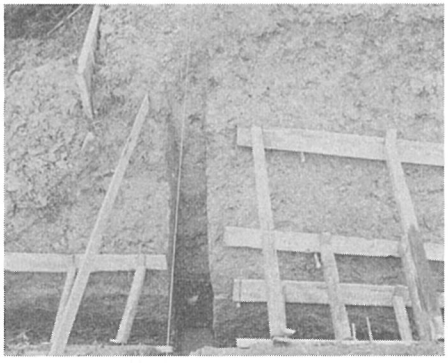


第10図　大原陵域内出土陶磁器破片



第９図　大原陵域内石組出土状況

第12図　右葺石部分



第11図　景行天皇陵渡土手葺石出土状況